

「取り囲む」へと

「探求」の Umgebung 概念をめぐる

水本 正晴

1 「探求」第一部と第二部

ワイトゲンシュタインの『哲学探求』（以下『探求』）は、周知のように二部に分かれている。それを讀んだ者は、パートIは主に言語について語られており、パートIIは主に知覚について語られている、という印象を受ける。これら二つの部分は主題的に分裂しており、相互に無関係にさえ見える。ハッカー（一九九六）も、彼の bulky なアナリティック・コメンタリーシリーズの最後の巻の序文において、ワイトゲンシュタインは第II部を第一部の中に組み入れて出版しようと思っていたのだという『探求』の編者の証言に対し（彼がそのような意図を持ったであろうことは認めながら）、もしそれが実行され

ていたとしても失敗したであろう、と決め付け、こう続ける。

確かにいかにしてそのような多くの題材、特にアスペクトの知覚についての長たらしい議論が、議論の構造の大きな分裂なしに現存するテキストの中へと組み入れられ得たか、理解困難である。（xvi）

そこで彼は、ワイトゲンシュタインの一九四六年以降の草稿は「新しい方向への旅立ち」を示していると考え、フォン・ライトに従って、結論する。

ワイトゲンシュタインが「将来の」ある段階におい

て、第二部を第一部のテキストの中へと組み入れたであろうとなかろうと、事実彼はしなかったのである。第二部は同じ本の一部分をなしてはいないのである。(xvii)

そしてこれが『探求』のコメンタリーのシリーズを第二部の分析なくして終わらせた彼の正当化なのである。

しかしこれは、『探求』の分析を16年もの間に渡って続けてきた人間の態度としてはあまりにも残念な結論であろう。彼らの意見を認め、もし第二部が全く新しい方向へ向かってしまっているとしても、それをもって二つの部分が何の関連もない、ということとは帰結しない。百歩譲ってそこに何の関連もなかったとしても、今度はウイトゲンシュタインの思想が「いかに」変化し、どの方向へ進み始めたのか、を示すことが彼の義務なのであり、それによつてまた第一部の読みにも新たな光を投げかけることができるはずなのである。あれほど異なるウイトゲンシュタインの二つの著作、『論考』と『探求』

の間の関係についての研究には事欠かないのに、同じ書物の中の第一部と第二部の繋がりが、哲学的に有意義な研究に値しないことがあるうか。

ハッカーは、明らかに、後期ウイトゲンシュタインの思想の核心は『探求』第一部に、それゆえ言語ゲーム論にあると考えている。だが例えばラツシュ・リースは、『青色本・茶色本』の序文で、アスペクトや「何かを何かとして見る」ことを巡る議論の背景には、『探求』前半部で彼の示した言語の描像があまりにメカニカルなものになっているのではないかという危惧があるのだと示唆し、その序文を「言語ゲームでそれほど多くのことができるわけではない」という言葉で結んでいる。彼のこの文章が正当な注目を集めてきたとは言いがたいが、私はむしろリースに従い、第二部の重要性を視野に入れながら『探求』全体を有機的に捉えることを目指したい。私はそのために、ここで *Umgebung* というあまり注目されることのない語を取り上げて、その語の背後に横たわる考えを掘り起こしてみたい。この語は解釈者の間でもほとんど言及されることはなく、たと

え例外的に注目されても、『探求』第一部の使用を中心として展開されており、第二部における使用は考察から抜け落ちてきた。これに対し、私はここで、この語への注目が『探求』の本当の転回点を明らかにし、延いては『探求』全体、さらには『確実性』を含むウイトゲンシュタインの後期思想全体に全く新しいアスペクトを切り開くことになる」と主張する。

2 Umstand v. Umgebung

【探求】に登場する Umgebung の節（とページ数）
5' 18' 97' 216' 250' 412' 539 (2)' 540 (2)'
583 (2)' 584 (3)' 603' p.181' p.195' p.208'
p.210' p.215' p.219（下線は『探求』第三版の Register に実際に登場するもの。）の中の数字は複数回登場した場合の数）

一九六七年の第三版から付いた『探求』巻末のインデクスには、Umgebung という語がすでに挙げられているが、そこにはたった五つしか登録を見出せない。ところが私の調べた結果では、上に見るよう

に、十七箇所に渡り、計二十二回も使用されているのである。インデクスは、第二部における言及の全てを無視している。そしてこれが、これまで第二部におけるこの語の役割が見逃されてきた一因であろう。編集者は、ここにおけるこの語の使用を重要でないと考えたか、少なくとも第一部における使用とは性質が異なり、第一部の使用こそが本質的である、と考えたのであろう。しかし、果たしてそれは本当であろうか。

【探求】におけるこの語の使用を一つ一つ見ていけば、第一部の前半（第二一六節まで）は、様々な仕方で使われ定まった意味を持たないが、それ以降、この語は以下のように Umstand という語とほぼ同じ意味で使われているのがわかる。

自分にとって全く親しみのない言語が通用している未知の国へ、研究者としてやってきたと思え。どのような状況 (Umstanden) のもとであなたは、その土地の人たちが命令を下し、命令を理解し、これに従い、命令に逆らう、等などと言うであろうか。(PU)

なぜ犬は痛がっているふりをすることができないのか。[三] 恐らく、特定の状況の下では、痛みを感じていないのに痛がっているようななき声を出すよう、教え込むことができよう。だが、本当にそう見せかけるためには、この振る舞いにはまだ相変わらず正当な周囲 (Umgebung) が欠如している。(PU 250)

どのような種類の状況 (Umstände) のもとで我々は相手に問うのだろうか。「あなたがこれを想像した時、あなたの中で何が起こっていたのか」と。
——そして、どのような種類の答えを我々はそこで期待しているのか。(PU 394)

[三] 私はこの命題を、自分の見ている明るさの効果が脳の一部分の興奮によって生み出されているのを示すことを目的とするような、ある実験の最中に発言することもできたであろう。——しかし、私はこの命題を、日常的なパラドクシカルでない意味を

持っているような環境 (Umgebung) の中では発言しなかった。(PU 412)

ここにおいて考察の主題となっているのは、特定の状況の下で有意味となり得ているが、もしそれらが違っていたら意味をなさなかったか、違つた意味を持つたであろうような発話や振る舞いである。Umgebung も Umstand も、そのような発話や振る舞いに先立ち、それらに意味を与え、理解可能にする何かと考えられている。だがそれら自体が分析の対象となつていないのではない。主題はあくまでもそれを前提して行われる言語ゲームである。しかしながら、これ以降、Umgebung はそれまでの Umstand の意味を引き継ぎながら、さらにそれとは違つた新しい独自の意味を持つようになる。それは両方の語が使われている、第五三九節から始まる。(その英訳では Umgebung はアンスコムにより context と訳されている。)

私は微笑を浮かべた頭部を描出している像を見

る。その微笑がある時には好意あるものとして、ある時には悪意に満ちたものとして捉える時、私は何をしていいのか。私はそれをしばしば、好意ないし悪意に満ちた空間的・時間的取り囲み(Umgebung)の中で表象しているのではないか。すると、私は、この像に加えて、この微笑を浮かべている者が遊んでいる子供を見下ろして笑っているとか、その反対に敵の悲しみを見下して笑っているとか、想像しているのかもしれない。

この点については、私が一見好ましい状況をそれ以上の取り囲み(Umgebung)によつて別様に解釈することもできる、という事実によつて、いささかの变化も生じない。特別な事情(Unsünden)が私の解釈を転換しないなら、私はある種の微笑を好意あるものと捉え、「好意ある「微笑」と呼び、それに応じて反応するだろう。(PU 539)

ここにおける「微笑」は、明らかに一つのアスペクトとして捉えられており(直前の第五三六節を見よ)、第二部のアスペクト転換の議論を先取りする

ものとして興味深い。そしてこのような考えこそが『探求』後半を特徴づけるものであると私は考える。この節の第一のパラグラフによれば、像を違つた風に見るといふことは、取り囲みを「想像する(vorstellen)」、「解釈する(deuten)」と結びつけている。UmgebungもUmstandもアスペクトを転換させ得る背景であるが、事実に世界の側にあるUmstandに對し、Umgebungは我々自身のそのような(我々の側)「活動」と結びついていることに注目して欲しい。こうしてこれまで単に「条件」として要請されてきたUmgebungが積極的に主題化されてくるように見える。そのことは、次のような節からも見て取れる。

ある人は一秒間衷心からの愛や希望を感覚できるのだろうか。——この一秒に何が先行し、あるいは後続しようとも。——今起こっていることに意味があるのは——このような状況(Umgebung)においてである。状況(Umgebung)がそれに重要性を付与するのである。……(微笑んでいる口が微笑んでいるの

は、人間の顔の場合だけである。) (PU 583 強調前者水本、後者原文)

ここにおいて *Umgebung* は文の主語として使われ、出来事や振る舞いに意義を与えるという積極的な役割を担っている。その意味で取り囲まれるものよりもむしろ取り囲みそのものがここで強く意識され、強調されているのである。(それに対し、前半部においては *Umstand* も *Umgebung* も *Umgebung* まで積極的な意味で主語となっている例は見られない。) そして次の節に、有名な「王の戴冠式」の例が述べられていることにも注意せねばならない。ここでは、壮麗な戴冠式も、その出来事のうちの一分間をその状況 (*Umgebung*) から切り離して別の状況の下に置いてみれば、それが全く滑稽なものと見えてくる、ということが語られる。ここでも *Umgebung* と我々の想像との関係が密接であることに異論はないであろう。さらに注目すべきことに、「探求」の第二部においては、*Umgebung* は “*umgeben*” と動詞の形で以下のように使われている。

私は二つの画像を見ている。一方ではウサギ・あひるの頭がウサギに取り巻かれて (*umgeben*) おり、他方ではあひるに (取り巻かれているのを)。私には同等性が認められない。(PU p. 195)

そしてそれを取り囲む (*umgeben*) 自分の空想次第で、私はそれを様々なアスペクトの中に見ることができ。(PU p. 210)

「それが私の口に出かかっている」という言葉は、「今や私はその先を知っている!」というのと同じように、体験の表現ではない。——我々はこの言葉にある種の状況 (*Situationen*) の中で用いるが、それは特別な種類の振る舞いに、また多くの特色ある体験に取り囲まれて (*umgeben*) いる。(PU p. 219)

最初の例だけでもこの概念が第二部においてもいかに重要であるかがわかるはずである。第二部の主要な主題であるアスペクトの変化は、像が取り囲ま

れることによつてもたらされるとここで明確に示されているのである。上の第五三九節において、明らかに「取り囲みによるアスペクトの変化」という考えがすでに前提されていたが、それがアスペクトの転換を主題的に論じる第二部になつて、取り囲みの働きはよりはつきりと意識され、その語自身が動詞として使われるようになったのである。

第二の例においては、Umgebungは何か発見されることを待つてゐるようなものではなく、主体が自発的な想像によつてUmgebungするものとして登場する。Umgebungが単なる背景のようなものに留まる限り、それは我々の思考の主題としては現われなない。それは「知つてゐる」と意識されない知として、普段はただ「文脈」と呼ばれてゐるものである。しかしそれが動詞として使われることによつて、それは今や主体の意志的な活動と結びつき、思考や信念の形成、あるいは世界の認識においてアクティヴな役割を演じてゐる。地と図の対比からすれば、今や背景としての地が考察の主題となつてゐるのである。

第三の例においては、ある表現がある特定の状況の中で用いられるのであるが、その状況自体が様々なものに取り囲まれてゐるとされている。ここで「取り囲む」ものは、具体的には振る舞いであり体験であるが、さらに重要なものとして「語を思い出す」といった時間的に後の出来事も含まれる、ということである。このことは、取り囲みとして考えられるものの範囲がいかに広いかを物語つてゐる。(よつて取り囲みには当然、社会的状況や自然誌も含まれ、時間的には現在(あるいは未来)が常に過去を取り囲む、という関係にあることがわかる。)そして、この取り囲みは空間的にも時間的にも同心円状に広がつていき、さらに広い取り囲み、そのまたさらに・・・と続いていくのである。

このような「取り囲み」は「状況」と違い、自発的な活動と結びつき、アスペクト転換をもたらしことのできるダイナミックな概念であること可言えよう。

3 「探求」内の転回と連続性

このような「取り囲み」の考えは、以下に示すよ

うに『確実性』にまで引き継がれており、私はこれがウイトゲンシュタインの最も円熟した思想を代表するものであると考えている。ここではこの思想を彼の（単なる「後期」と區別して）「最後期」の思想と呼びたい。そしてこれまでの議論が正しいならば、我々が『探求』内部に見出すべきギャップは、フォン・ライトやハツカーの主張するような第一部と第二部の間ではなく、この思想が現われる前後、に見出されねばならないと言えるだろう。ではそれは、具体的にはどこにあるのか。

ウイトゲンシュタインは1944年の秋までに書き上げた（後に『探求』となる）部分に対し、45年の1月序文を書く。それはフォン・ライトにより『探求』の「中間版」と呼ばれているものであるが、その時点においてそれは全体で三〇〇節から成り、最後の節は現在の第45節であった。ところが彼はすぐに新しいタイプ原稿を口述し始める。このTS228と中間版から『探求』第一部の最終稿（TS227）が出来上がるのであるが、TS228は主に既に書かれた手稿から成っていることから、そこに登場する

考えは以前からすでに彼の中にあつたことがわかる。

しかし上に示したように、この「取り囲み」の考え方が登場するのは第五三九節からであり、中間版の中にはこの考えを展開した部分は恐らく含まれていなかった。このことは彼が意図的にこの考えを『探求』後半まで保留しておいたと見ることができよう。さらに、『茶色本』の構成、つまりそれが第一部と第二部に分かれ、第一部がアウグステイヌスの言語観から出発して言語ゲームの考えを導き、第二部でアスペクトや「として見る」ことが論じられる、という構成を見れば、ますます『探求』第二部の議論が唐突な方向転換であつたという考えに説得力はなくなる。『探求』が『茶色本』の書き直しとして意図されていたのなら、『探求』第二部はすでに最初からある程度想定されていたと考えるべきであろう。『探求』第二部の基となる手稿は主に一九四六年から四九年の間に書かれたわけだが、内容的にはすでに見たように第一部の後半（四二二節以降）と連続的に繋がっており、後者ははるか中間版以前の草

稿から選び取って構成されたものであった。実際、『探求』第四二二節（中間版）以前は *Umgebung* は（アドホックな使われ方で）六個所に登場するのに対し（*Umsand* は一九個所、それ以降（第二部も含めて）は十個所一五回も使われている（*Umsand* 一二個所）。第二部に先立って既にここからそれまでと違う展開が始まっているのは明らかだろう（これ以降、『探求』前半部）とは第四二二節までを、「後半部」は第四二二節以降と第二部を合わせたものを意味する）。それはウイトゲンシュタインが『探求』後半部のアプローチを前半とは違うものとして意識していたことを示すかもしれないが、同時に第二部が「全く新しい方向への出発」であった、ということも逆に否定するものである。

4 アスペクトと「取り囲み」

ではしかし、この「取り囲み」によって、『探求』に実質的には何が加わったというのだろうか。この考えがアスペクトを巡る議論と結びついているのを見えた。よってこの問いへの答えは、「取り囲み」の

導入によってアスペクト概念がいかに変貌したかを示すことによって答えることができよう。『探求』の「としてみる」ことやアスペクトを巡る議論は特に第二部で集中的に論じられるが、前半部ですでにアスペクトの概念が方法的に重要な役割を演じているのは見逃されがちである。ただしここではそれは「取り囲み」でなく「展望」という概念と結びついている。ペイカー（1991）は『探求』前半部の *übersicht* 念を分析し、そこにおけるウイトゲンシュタインの方法論を、異なる表現や別の可能性を並置することによって正しいアスペクトを見えるようにする、というものであると説得的に論証する。それは我々を捉えて放さない特定の見方（像）（*obj. PU15*）から自由になるためであり、そこで問題となっているのは我々が陥りがちな哲学的思考様式であった。よってそこにおけるアスペクトは主に失われたり（*PU63*）、隠されていたり（*PU129*）、逃げた（*PU38*）ようなものである。それに対し、第四九三節では、想像によってアスペクトが全く変わってしまうことが示唆され、第五三六節では、臆

病な顔を大胆な顔と考えることができると言う時、我々はアスペクトについて語っているのだとされる（後者はすでに見た第五三九節の取り囲みによるアスペクトの転換の議論に直接繋がっていく）。ここで浮かび上がる『探求』前半部と後半部のアプローチの違いは以下のようなものである。

前半部においては「状況」が言語ゲームに先立ちそれを制約するものとして前提されていた。それを正しく見ない者は、誤った像に捉えられてしまい、逆に誤った像に捉えられた者は状況を見ようとしな（よって「考えるな、見よ!」）。展望の効いた叙述によって、我々は新しいアスペクト（別の可能性）を見出すことができる。しかしそれはまだ、何が「正しい」アスペクトであるかについては語っていない。そしてそこにこそ状況が必要とされるのである。ところが後半部において、ウイトゲンシュタインは逆に状況を捨象してみよ、と勧めているかのようである。つまり命題や像や振る舞いを、それを取り囲む状況から切り離し（PU 525, 583-4, 652, etc.）（想像により）別の取り囲みを与えることで、それが

（アスペクト転換の結果）別様に見える、という事実を目を向けさせるのである。まとめるならば、状況は言わば「非自発的取り囲み」、想像は「自発的取り囲み」として相互補完的に働いているのであり、それによって初めてアスペクトと取り囲みの間のダイナミックな関係が浮き彫りにされるのである。

5 「規則に従うこと」と取り囲み

こうして『探求』の前半部と後半部とが「取り囲み」の思想を媒介としていかに密接に結びついているかが見えてくる。取り囲みの考えを理解した我々は、その観点からもう一度『探求』前半部の議論を捉え返すように促されるのであり、その意味で『探求』後半部は前半部の思想をあたかも取り囲むような役割を果たしているのである。そしてその結果『探求』前半部はそのアスペクトを転換することになる。以下ではそれを具体的に見るために、その考えを前提すれば規則に従うことを巡る議論がどのように見えてくるかを簡単に見てみよう。

9. 「事実」 ネットカーキユーヴやウサギ・あひるの図のように、確定した取り囲みのない図形は、どちらのアスペクトが「正しい」か、という事実性を欠いている。だが他方、特定の状況の中に埋め込まれていれば、例えばそれはウサギとして見る「べき」である、ということが言えるようになる。「意味している」「規則に従っている」といった事実も、それを取り囲む状況の中で初めて成立するのである。この「事実の状況依存性」と呼ぶべきものを無視すれば、我々は規則や行為を恣意的にいかようにでも解釈できる、という考えに屈することになる。「状況」がなければ「いかなる規則に従っているか」に事実性 (fact of nature) は存在し得ないからである。しかしもしそうならば、例えばこれまでの過去の足し算は有限である以上、新たなクワスの慣習で取り囲めば、過去我々が「何をしてきたか」についてのアスペクトは転換し、我々はずっと足し算でプラスでなくクワスを行っていたのだ、ということが事実となるかもしれない。だがこれは取り囲みには終わりが無い、ということの意味しているだけで、同様のこと

は歴史的出来事についてよく起こることであり、人はしばしばその時には本人にも決して知り得ないことをなしてしまふことがある。(例えば「後に独裁者となる男を生んだ」) しかしそれでも事実は取り囲みに依存していることに変わりはなく、ここから事実の反実在論を導き出してはならないのである。

マクドウェル (McDowell 1984) がクリプキの懐疑論に対し、共同体による慣習を持ち出して事実を擁護したのは恐らくこのような考えを背景にしてであろう。しかし、そのように慣習を取り囲みとして与えることがいかにして我々の恣意的な解釈を制約するのか、の具体的なメカニズムが与えられない限り、それがなぜそもそもクリプキの懐疑に対する解答であるのかを見て取ることは非常に困難である。そこでは我々は、規則に従うことは様々な解釈の中からあるものを (自発的に) 選択することであり、よってそれぞれの場面で我々は「決断」をしているのである、といった根元的規約主義 (それは結局全ての理解を解釈に、全ての「見る」を「として見る」に還元する立場である) に容易に陥ってしまう。

5.2 「自然」 これに対し、取り囲みの議論が明らかにするのは、取り囲みによってアスペクトが「自然に」転換する、ということである。これは状況がアスペクトを自然に制約している、ということであり、それは我々の自発的解釈や決断に先立っているのである。このことはアスペクトを見ることが言語ゲームよりも遥かにプリミティブな能力であることを示している。その意味でアスペクト転換は動物にも可能であるかもしれない。そしてその時人間に特徴的であるのは恐らく「自発的に」アスペクトを転換させる能力であろう。我々はここにリースの言っていた言語ゲームという方法論の限界を見て取ることができる。ウイトゲンシュタインは確かに

『探求』前半部において我々の慣習を含んだ「自然の諸事実」を強調する。しかしこのアスペクト転換という自然が与えられない限り、目につくのは我々を「盲目的に」規則に従わせる傾性ばかりなのであり、それを（あまりにメカニカルな説明だとして）拒否するならば、今度は逆に我々の「自然な」部分を全

く捨象して、規則に従う行為を全て自発的判断に還元してしまう根元的規約主義しか残されていないかのように見えてしまう。取り囲みの議論によって初めて、自分自身の行為もすでに（状況に制約された）特定のアスペクトの下で捉えられている、ということが明らかになり、我々がいかにして「自然に」規則に従うことができているかが理解できるようになるのである。

5.3 「存在論的ギャップ」 このような考え方の理解を妨げる要因の一つに、我々がアスペクトを何か「内的な」ものと考えてしまうことがある。アスペクトを「私的な」ものや我々の「頭の中」にあるものと考えると、アスペクトによって行為をいかに捉えるか、という疑似問題が生じてくる。（あたかも両者を比べることができるかのようにな）。確かに『探求』前半部では、「像」と世界との間にはギャップがあるかのように語られる。しかし、我々が哲学の病から抜け出すのは、正しいアスペクトを見るようになることによってであり、それがアスペクト転換の過程

であるのならば、そこにあったのは存在論的ギャップであったと考える必要はない。例えば欲求の場合であっても「ここにケーキがあつて欲しい」と我々が望む時、我々はまさにここにケーキを望んでいるのであり、頭の中に望んでいるのではない。実際、「内的像」という概念は、「外的像」をモデルにしており混乱を招く(PJ, p. 178)。アスペクトの認知が「視覚体験プラス解釈」(p. 193)ではないとすれば、経験内容としてのアスペクトがすでに概念的であっても、世界との間に存在論的ギャップはないと考えるべきであろう。

5.4 「誤り」と「規範」 しかし、存在論的ギャップがないにしても、アスペクトとそれに従つて身体を動かす「傾性」の(二つの自然の)関係はあくまでも「自然な」繋がりでしかない以上、自分が「何をすべきか(観察によらない実践知としてのアスペクト)」、「何をしているか(そのアスペクトの下で捉えられた行為)」、との間に(存在論的でなく内容に関する)ギャップ(例えば簡単な計算間違い等)は

生じ得る。しかしこのタイプの「誤り」の場合、(アスペクト転換が生じない限り)訂正されたり非難されるのはアスペクトでなく行為の方なのであり、これはアスペクトによる行為のコントロール可能性の問題である(「規範性」はまさにここにおいて意識されることになる)。だが圧倒的に多くの場合「誤り」は行為でなくアスペクトに関わつており、本人はより広い取り囲みを知つた結果アスペクトが転換することでそれを認識する。このことが意味するのは、ここでの誤りの原因は(取り囲む状況についての)無知に存する、ということである。とにかくいずれの場合においても、規則と行為はすでに同一のアスペクトの下で捉えられている以上、そこに通常(自発的)「解釈」で埋めるべきギャップはない、ということ是指摘しておかねばなるまい。

6 まとめと展望 Umgebung プログラム

小論ではウイトゲンシュタインが『探求』第二部を第一部後半に組み込もうと考えていた、というアンスコムらの証言を内容的にも確認することができ

たのではないかと思う。もしそうならば、それが行われてもきつと失敗したであろうと決め付けるハッカーの言葉がいかに根拠のないものであったかが示されたはずである。『探求』内部に新しい方向への「転換」があるとしても、それは第一部の後半からすでに始まっていた。しかも『茶色本』との連続性を考えれば、『探求』は第二部も含めた全体で初めて完結するのであり、ウイトゲンシュタインが『探求』に第二部を付け足したのは決して単なる気まぐれではなかったのである。

最後に、上で少しだけ展開した「取り囲み」の思想は、言わば「Umgebungプログラム」として一つの大きな全体をなすべきものであり、ここではその射程を（規則に従うこと以外の）いくつかの重要なトピックについて粗描を与えることで浮かび上がらせたい。

(1) 数学の哲学

この取り囲みの考えはその起源から彼の数学の哲学の展開と密接に関わっている。我々が『探求』第二

部で見た Umgebung の動詞としての使われ方も MS119 の一九三七年の書き込みに既に見られ (PO p. 376)、この考え方の数学の哲学との繋がりをうかがわせる。『探求』において排中律の問題が「像」の観点から語られている (PUSO) ように、そもそも数学的「ねばならぬ」も「像」と「他の可能性を見ないこと」によって考えられているのであり、「証明は展望可能でなければならぬ」という要請もここに関わっている。であれば、そこにもやはり取り囲みによるアスペクト転換の可能性が前提されていると考えるべきであり、以下のようなウイトゲンシュタインの言葉はそれを確認するものである。

証明は命題の取り囲み (Umgebung) である。(RFM p.195 (rev. p. 433))

またここで初めて我々は、彼がいかなる意味で「証明が命題に意味を与える」と考えていたかを明確に理解することができるのである。この観点から彼の数学の哲学は読み直されねばならない。

(2) 心的内容の因果的効力

ボゴジアン (1939) は、この問題が我々のように意味や心的内容の非還元論的立場を取る者にとつてのただ一つの最も大きな困難であると考える (p. 116)。しかしすでに見たように、(アスペクト (心的内容) と自然に結びついていれば、身体を動かす動力因は盲目的な傾性でよいのであり、アスペクトはそのような身体の運動と (教育と訓練を含めて) 「統制的に」関わる。その結びつきは例えばエンジンに対するステアリングのような関り方ではないだろうか。その意味でこの繋がりは出来事因果というよりは事実因果であると理解すべきであろう。アスペクトを頭の中のものとするならともかく、アスペクトと世界の間には存在論的ギャップはない以上、心的内容は頭の中に限定されていない。よつて我々はむしろ日常心理学に基づいた語り方、例えば「彼は信号が青に変わったから車を発車した」をそのまま (事実因果の意味で) 因果言明としてもよい、ということになる。

(3) 自発性 / 受動性

上において解釈や想像を自発的なものと見なしてきたが、それはそれらがある種の活動であるからだとか、カント的に悟性の働きの活動であるからではない。それは一般にそれらが与えられた文脈から独立になされたり、新しい文脈を生み出す端緒であるからであり、自発性 / 受動性の区別こそが実は取り囲みに依存しているのである。概念能力の働きの即自発性としてしまうならば、いかに脅迫されていようともそこに判断が働いている限り全て自発的の行為と見なされねばならなくなる。しかしそれではそもそもこの区別の眼目を失ってしまうことになる。この点についてはアリストテレス (『ニコマコス倫理学』) による分析が役に立つ。曖昧な部分もあるが、彼の考えは我々の取り囲みによる定義に近い。彼は二種類の非自発的 (不随意的) 行為を区別した / 一つは脅迫などによる強制された行為であり、もう一つは無知ゆえになされた行為である。だが両者は適切な取り囲みを与えることで初めて非自発的となることに注

意したい。我々の自発性／受動性の区別は本質的に取り囲みに相対的なものであり、そこから取り囲みをより大きくすればするほど人間の自発性が失われて歴史的必然の中に飲み込まれていくのが理解できよう。

(4) 行為論

ニコマコス倫理学におけるアリストテレスの関心は倫理的なものであり、我々のものとは少々異なるが、我々は少なくとも通常は「自発的に」誤ることはあり得ない。よって我々の誤りについても、この観点からもう一度捉え直すことができよう。対応する二つの誤りを考えるならば、まず脅迫は、状況に対するコントロールの欠如、と見れば、それに対応するものは、やろうとしてできなかったもの、例えば言い間違い、書き間違いのような主に身体のコントロールの欠如に由来するもの、とできよう。そしてもう一つはそのまま、無知ゆえになされた誤りである。後者は行為の場合には理解しやすい。しかし経験における誤りは、無知との繋がりを認識するの

は難しい。だからこそ哲学者は経験における誤りを説明するのに失敗してきたのであり、逆にこのことが経験を究極の正当化への根拠とする考えを可能にしてきたのである。本論で粗描した誤りのモデルは取り囲みによるアスペクト転換という考えを使うことで初めて経験の内容と無知との繋がりを示すことができたのである。

経験におけるコントロールの欠如は、アンスコムが実践的知識とした「観察に拠らない知識」をアスペクトとして理解することで、また興味深い事実を説明する。例えば禁煙に取り組むある人のアスペクトによれば、ある経験が「最後の一本を吸う」という経験であるとしよう。しかしその認識を誤りにしないためには、彼はそのアスペクトを以後の行為で自ら取り囲むことによってそれを「事実」としなければならぬのである。コントロールが欠如すれば、その認識は誤ったアスペクトに基づいていたことになる。「知っていれば意志の弱さはあり得ない」というソクラテスの理想が成立しないのは、よって、「知識」そのものが以後の行為に依存している、

という事実によって説明されるのである。この理解にもアスペクトが不可欠であった。

(5) 全体論

クワインは『二つのドグマ』において、「体系全体を出来るだけ乱すまいという我々の自然な傾向」について語っている。その「自然な」傾向には、取り囲みによるアスペクトの自然な転換を加えねばならない。全体論的制約は整合性を前提し我々の（自発的）推論と判断に依存するものと、アスペクトと取り囲みによる自然な制約とがあり、後者は主に経験内容を制約している。丹治 (Tanji, 1988) もクワインの全体論は観察文にまで拡張されねばならないと指摘したが、それに加えてそこにおける全体論的制約が「自然な」ものであることを強調しなければ、様々な可能な傾性としてのアスペクトの内どれが「正しい」ものであるか、クワインのアプローチでは文字どおり理論の全体を自発的に検査してみるまでは言えないことになる。そのような全体論はあまりに不自然であり、その意味で彼の自然主義は不自然な自然主

義であると言わねばならない。

(6) 内在主義

我々は経験を「外的」な制約と考えることを拒否する。また我々は「誤り」が（コントロールの問題であるトリヴィアルな例を除けば）無知に存ずるとした。適切な状況の下では経験内容としてのアスペクトとはそれだけで「知識」としての権利を持つのであり、そこでは正当化も検証も必要ない。それが誤っている可能性も当然あるが、それは状況についての我々の無知に起因するのであり、それが正しく捉えられている限り我々は我々の自然な認識能力によって経験的知識を得ることができる。これは一種の *fallibilism* であるが、認識論的外在主義と違って「外からの」正当化をも要請しない。この立場は、あくまで（社会に取り囲まれた）個人の視点に留まりながら「正当化」も「誤りの認識」も全て全体論的に理解できるとする。そしてここでは知識とは「達成される」ものであるよりは最もプリミティブなものであり、「正当化の仕方」も「信念」も「真理」もむ

しろ知識に依存し知識によって説明されるものとされ、その結果主観は「知識と信念」から成るのではなく「知識と無知」から成り、同時に世界も「既知と未知の絡み合った構造」(フッサール)として捉えられることとなる。この無知が我々に実在論的態度を不可避的に要請することから、このような徹底的な内在主義であつても心に「外部」を組み入れることが出来、独我論に陥ることはないのである。

(7) 相対主義

我々を取り囲む状況も、すでに特定のアスペクトの下で捉えられている。しかしこれは循環ではない。状況としての取り囲みは同心円状に広がってき、最後には無知に到達するが、そのような無知も含めて全体が究極のアスペクトとして「世界像」を構成している。この世界像は究極の取り囲みとして機能し、我々の個々のアスペクトに安定性を与えているのである。確かにこのイメージはデーヴィッドソンの批判する概念粹相対主義のように見える。そして実際我々はそれを否定する必要はないのであり、

世界像と世界との間に存在論的ギャップがなければ我々はすでに世界と無媒介的に接触しているのである。もちろんこのことは我々の世界像が必ず共有されている、ということを保証しない。しかし「もし」共有されていなければその違いは世界像の違いとして文法に反映されることであろう。それ以上の独立の規準は存在していないし、必要でもない。そう考えれば彼の「確実性」が、我々とラディカルに異なるアスペクト(世界像)を持つ懷疑論者との対話としてウイトゲンシュタインの次の必然的なステツプであつたことがわかるのである。そこではそのような状況において世界像を共有するために「説得」しかないことが示唆されているが、それこそが「取り囲み」の実践であると理解できよう。つまり相手を取り囲むことにより、相手のアスペクトを転換させるのである。「改宗」はこのようにして起こる。

これは論証の正しい方が勝つ、というこれまでの主知主義的モデルから、「正しい・誤り」を「説得性」の中へ還元し、より説得的な世界像が相手の世界像を取り囲み、その結果アスペクト転換を起こさせ

る、という自然主義的「取り囲みモデル」への転換であると言えよう。ここでは我々は中立的な第三者を必要としない。そのような立場を偽って主張するのがこれまでの哲学であつたのなら、ウイトゲンシュタインの立場はそのような哲学からのラディカルな離反である。しかもこれは自然主義的態度を前提したものであり、反相対主義者の言うような安易な懐疑主義ではない。またウイトゲンシュタインがしばしば強調する「根拠を欠いた信念」(PU 223, 607, p. 200, 215, UG 166, 175, 212, 253)と、うのもまた、我々が常に無知に取り囲まれてある、ということを考え合わせれば決して哲学的脅威ではない。我々の世界像の内部では、根拠を欠いていることは問題にならない。時に起こる自分自身の世界像と信念とのギャップがそのような事実を意識させるだけであり、その時には多くの場合信念がアスペクト転換を被り「誤った信念」として見えてくるであろう。そしてそれが蓄積すればまれに世界像そのものが転換することもあるであろう。これはクーンらの提示する「科学革命」のプロセスと何ら変わるも

のではない。

この「取り囲みモデル」は我々の通常の見解の食い違いを特定の「正しさ」の規準にもつて判断するのではなく、それを「無知」の問題に還元する。つまり、我々がアスペクトを共有できていないのは、お互いが相手の見解の取り囲みを「知らない」からなのである。他者の理解は相手を「知る」ことによつてなされるのであり、決して同情や感情移入によるのではないのである。もちろんこのことは、単に知るだけで我々のアスペクトが一つに収束していく、ということを含意しない。それどころか相手のアスペクトを知ることができれば我々はそもそもそのような一元的な世界を必要としないであろう。

Bibliography

Baker, G., *Philosophical Investigations section 122*:

- neglected aspects*, Wittgenstein - s Philosophical Investigations: Text and Context, ed. by H-J Glock, Routledge, (1991).
- Boghossian, P. A., *The Rule-Following Considerations*, *Mind*, Vol. 98, (1989).
- Brandon, R., *Knowledge and the Social Articulation of the Space of Reasons*, *Philosophy and Phenomenological Research*, Vol. LV. (1995).
- Candlish, S., *Das Wollen ist auch nur eine Erfahrung*, *Wittgenstein's Philosophical Investigations: Text and Context*, ed. by H-J Glock, Routledge, (1991).
- Gier, N. F., *Wittgenstein and Phenomenology*, State University of New York, (1981).
- Hacker, P. M. S., *Wittgenstein: Mind and Will*, Blackwell, (1996).
- McDowell, J., *Wittgenstein on Following a Rule*, *Synthese*, Vol. 58, No. 3, (1984).
- McDowell, J., *Mind and World*, Harvard, (1994).
- 水本正晴「「事実」と「出来事」デーヴィッドソンのアプローチに抗して」科学基礎論研究第九二号、1999 年。
- Strawson, P. F., *Review of the Philosophical Investigations*, *Mind* Vol. 63 (1954).
- von Wright, G. H., *The Origin and Composition of the Investigations*, Wittgenstein, Blackwell, (1982).
- Wittgenstein, L., *The Blue and Brown Books* (BB), Basil Blackwell, (1994)
- Wittgenstein, L., *Über Gewissheit*, Harper Torchbooks (UG), (1969)
- Wittgenstein, L., *Remarks on the Foundations of Mathematics* (RFM), (rev.1983)
- Wittgenstein, L., *Wittgenstein's Lectures on the Foundations of Mathematics* (LFM), Cambridge, 1939, ed. by Cora Diamond, The University of Chicago Press, (1975)
- Wittgenstein, L., *Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge, (1958).
- Wittgenstein, L., *Philosophical Investigations* (PU), Blackwell, (1958).
- Wittgenstein, L., "Cause and Reason", *Philosophical*

Occasions(PO), Hackett, (1993)

黒崎宏 「訳・解説者まえがき」『哲学探求』第二部・
読解訳・解説 黒崎宏 産業図書一九九五年

(みずもと まさはる 一橋大学)

編集後記

今回は、シンポジウムのテーマが「身体論再考の試み」ということで、いずれも旧来の哲学・思想史研究の枠には収まりきれない研究者の方々に発表していただきました。このことはロゴスの他者としての身体に対する哲学的アプローチが、まだまだ決して豊かに開発されたとは言えない状況を考えると、必然的だと言えるかもしれません。いずれにせよ、連絡の段階から当日の発表、寄稿に至るまで、発表してくださったお三方には本当にお世話になりました。どうもありがとうございます。

個人研究発表に関しても、例年になく自主的に申し出てくださった方がほとんどで、改めて「若手ゼミ」という場がどういう意義をもっているのかを考えさせられました。

今年も編集者側のさまざまな不手際のせいで予定よりも大幅に刊行が遅れてしまいました。毎度のことではありますが、執筆者をはじめご迷惑をこうむった方々にこの場を借りて深くお詫びさせていた

だきます。

さて実は現在、この『探求』のあり方自体を考え直そうという意見がでてきました。そもそもわざわざ研究発表していただいた方に執筆料まで支払ってもらおうというあり方が、既存の研究会・学会と乖離してしまいました。一方でもちろん既存の学会・研究会の権威や過度の専門化にとらわれないという「若手ゼミ」の理念を尊重することが大切ですが、他方では「若手ゼミ」や『探求』自体がその他の研究会および研究誌のためのスパーリング的な性格をもっているため、現在新たな方向性を模索している段階です。一つの提案として、大学生協の片隅で販売するよりも、ホームページを開設して、アマチュアの人々や学生にも開放するというあり方のほうが理想的なのではないかというものもあります。

そういうわけで、『探求』を購入してくださった方々、OBの方々、新しく「若手ゼミ」に来てくれた若い世代の方々の率直なご意見をお待ちしています。

次回の「若手ゼミ」で、『探求』のあり方も含めて

議論していききたいと考えています。

九十八年度世話人

『哲学の探求』編集担当

村田憲郎（一橋大学）

☎ 042-577-3850

E-mail: gsd9711@srv.cc.hit-u.ac.jp

哲学の探求 第26号

発行：1998年12月1日

発行者：全国若手哲学研究者ゼミナール

連絡先：村田憲郎

〒186-0002 東京都国立市東3-16-13

ハウスシェリー202

☎042-577-3850

印刷所：東海大学印刷業務課

☎0463-58-1211



定価 1000 円